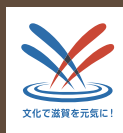


文化・経済フォーラム滋賀



News Letter

第4号 (2018年12月)

「アーティストと地域が生み出す新しい文化」
— その可能性と道筋をさぐるシンポジウムを11月24日、大津市打出浜の「コラボしが21」で開きました。具体的な実践を踏まえた講演、パネルディスカッションで考えました。

十倉 良一 (文化・経済フォーラム滋賀幹事)

講演「アートは地域に何ができるか」

椿 昇 氏 (現代美術家、京都造形芸術大学教授)

パネルディスカッション

椿 昇 氏

笹原 司之氏 (長浜芸術版楽市楽座運営委員会会長)

松岡 秀樹氏 (草津市職員)

藤原 昌樹氏 (彫刻家)

コーディネーター 十倉 良一



瀬戸内国際芸術祭 2010～

小豆島地域設計インサイドストーリー

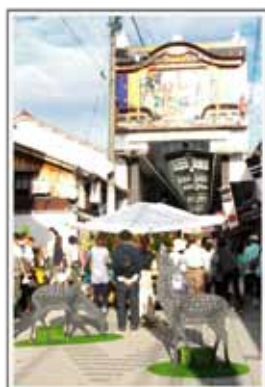
アートは社会システムの硬直をやわらげる有効な潤滑油となれたのか?

椿昇氏の講演資料より

椿昇氏の講演は、タイトルの「アートは地域に何ができるか」という問いかけに、自身の実践を通じて応えるものでした。瀬戸内国際芸術祭の2013年、16年小豆島プロジェクトのディレクターとして、アーティストだけでなく地域を巻き込んだ取り組みです。当初、地元の目は冷ややかで、アートイベントの効果が見えると、「ゆるキャラをつくってくれ」といった観光誘致を期待する注文があったそうです。椿さんは、「観光」より「関係」と説き、地域内の壁を壊し都会との交通アクセスやネット環境を整備する戦略を立て、一過性のアートイベントではなく地域の持続可能性に寄与することを考えました。都会の若いアーティストの大量投入、町役場の全職員参加、地場産業の製品デザイン開発、棚田アートによる環境保全、地元住民に常連客になってもらうジュエリー店開設、作品制作の地元発注など、アートと地域が絡んでいくようにしました。遠回しで見ていた住民の中から、現代アートを面白がるおじさんが現れ、観光客に作品を解説しているそうです。住民の意識は変わり、地域が自信を持ち始めたといいます。



パネルディスカッションでは各地の実践が報告されました。



笹原さんは、長浜市で30年以上続けている「アートインナガハマ」を市民だけで運営しているが、これからもっとアーティストとつながっていきたくと話しました。

草津市の文化施策に携わる若手職員の松岡さんは、「アートフェスタくさつ」をより地域につなげたいと考え、まちなかのお寺との関係づくりに動いています。



藤原さんは、大阪から移住した当初は「怪しい人」に見られたといい、何をやっているか知ってもらうためにシャボン玉アートを子どもたちに楽しんでもらう活動などを続けているということです。

椿さんからは、アートと経済がつながる仕組みが、世界的な潮流として出てきている現状が紹介されました。

アートは形のある作品だけではなく、地域に新たな活力を生むことが、シンポを通じて浮かび上がってきました。シンポジウムの議論は、2019年2月に発表する文化・経済フォーラム滋賀の提言に反映させます。

*シンポジウムの要約をホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

「文化芸術と地域活性化－創造都市と文化施設－」講師 佐々木雅幸氏(同志社大学経済学部特別客員教授)

今回のセミナーは、2000年頃から提唱され始めた「創造都市」の研究で著名な佐々木雅幸先生を講師にお招きして、文化芸術を活かした都市政策の事例をご紹介します。

21世紀は成熟社会を迎え、人々の消費志向が大量消費から個性的文化的な消費に変わり、創造経済の時代とも言われています。「創造都市」はこうした創造経済時代における都市の形であり、「市民一人一人が創造的に、働き、暮らし、活動する都市」(佐々木先生)を言います。とくに創造都市政策では、「創造の場」を都市の中にたくさん作ることが注目されており、創造経済時代の文化施設のあり方を学ぶ機会となりました。ここでは、セミナーでご紹介いただいた創造都市事例の一部を掲載します。詳しくは、佐々木先生の著書『創造都市への挑戦』岩波現代文庫(2012年)をご覧ください。

	工業経済	創造経済
生産システム	大規模生産 トップダウン	フレキシブル生産 ボトムアップ
消費システム	非個性的大量消費	個性的文化的消費
流通・メディア	大量流通 マスメディア	ネットワーク ソーシャルメディア
優位性	資産・土地・エネルギー	クリエイティブ人材 知恵知識・文化芸術
都市の形	産業都市	創造都市
ツーリズム	マストツーリズム	クリエイティブツーリズム

佐々木先生の講演資料より

※画像は全て佐々木先生の講演資料より引用

アートにより市民文化を変えて都市を再生

□ビルバオ(スペイン)／現代美術館による都市再生



復興の起爆剤となったF・O・ゲーリー設計の美術館

スペインのバスク地方にある都市ビルバオはかつて造船で栄えましたが、造船業の衰退とともに産業空洞化が進み、街は多くの失業者で溢れていました。グローバル経済の中では、新しい産業をいくら誘致してもまた賃金の安い国との競争で空洞化してしまいます。そこでヨーロッパの国々では、最後の都市資源として文化資源に注目するようになります。ビルバオは現代アートを軸にした都市再生戦略を決め、ニューヨーク・グッゲンハイム・ミュージアムの分館を誘致します。21世紀の都市として発展するためには知識労働(knowledge work)が主体とならなければならない。ビルバオは製造業を主とした労働者の文化を持った都市でしたが、知識労働者が好んで住む場所あるいはふさわしい文化(culture)の都市を目指し、芸術(art)の力で文化を変え、そして文化を変えることによって新しい人たちに住んでもらおうという戦略をとったのです。これが見事にうまくいき、世界のアート業界、建築業界で騒がれ、世界中から人々がビルバオを訪れるようになりました。そしてこれに引きずられるかたちで新しいオフィスができ、最も成功したと評される再開発の街となりました。

□ナント(フランス)／文化による都市再生

フランス西部の都市ナントも、ロワール川流域の造船で発展した都市でしたが産業空洞化が進みます。1989年、39才で市長に就任したジャン＝マルク＝エローは、文化で都市を蘇らせることに取り組み、まず文化局長に有名なプロデューサーを招きます。そして、産業遺産(工場跡)を創造の場に変えていきます。例えばビスケット工場跡をアートセンターに転換し、深夜2時までオープンしているカフェを併設するなど自由な使い方を進めます。さらに音楽プロデューサーのルネ・マルタンを誘致して、音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」を始めます。音楽祭は、クラシック音楽という古いものを新しい市民に受け入れられる仲立ちをし、その音楽祭をそっくり海外に輸出するという産業展開が雇用を生むこととなりました。そして、こうしたことが都市のブランドを上げていくこととなり、ナントはフランスで最も住みやすい都市と評価され、企業がオフィスを構えるようになり都市再生を果たすのです。

伝統と創造の文化都市政策

□金沢市／歴史都市と創造都市

金沢市は経済界と行政が文化都市、創造都市を作るという考えを明確に持っている都市です。前身の加賀藩は文化に財を投じたことで知られ、江戸・大坂・京から一流の学者・文化人・職人を集めて住まわせていました。400年前からアーティスト・イン・レジデンスをやっていたのです。このため、京都と並び伝統工芸が大変強いところです。現代では市制100周年で「アンサンブル金沢」をつくり、10年後に本拠地となる石川県立音楽堂が建設されます。ハード事業よりソフト事業を先行しているのが特徴で、また邦楽ホールと一体となっているのが金沢ならではの、結果的に経済効果が高いものとなりました。そして、紡績工場跡を「金沢市民芸術村」として開設。芸術の練習の場、創造活動の場として24時間使える施設です。文化施設は鑑賞型・消費型のものは多いのですが、創造型のものは少ない。「金沢市民芸術村」は内外から大変評価され、施設の使い方が良いとグッドデザイン大賞も受賞します。この成功を踏まえ、市役所の隣に現代アート専門の美術館をつくらうということになりました。当然、伝統工芸王国・金沢では「伝統工芸より現代アートを優先するとは何事だ」と反対が起きます。当時の市長は「みなさんの伝統工芸はそれぞれの時代に前衛でした。伝統というのは前衛の連続です。」と切り返し金沢21世紀美術館を実現しました。また公園のような美術館にしたいというコンセプトが良い結果を生み、伝統の街の中心に現代アートが並び、文化の重層性が感じられる都市となっています。



金沢市民芸術村

会員交流

文化経済アートステージで自社の価値を再発見！

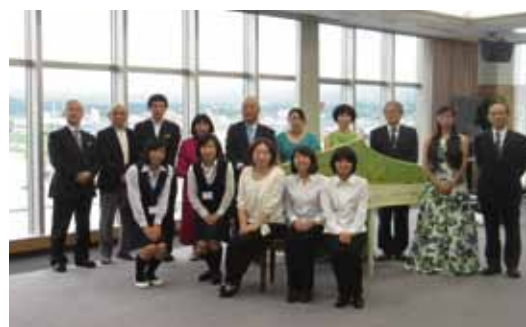
法人会員 甲賀高分子株式会社 人材・地域開発室長 執行役員 深井 俊秀

2017年10月、文化・経済フォーラム滋賀事務局からご提案いただき、新社屋完成の機会に文化経済アートステージ「ひととまちとアートが会うコンサート」を当社で開いていただきました。

井伊亮子さん (FL)、足木かよさん (VI)、光永秀子さん (Cemb) のアンサンブルが素晴らしかったのはもちろんですが、自社の3人の女性社員が名乗りを上げて「みらくる」というホルントリオを臨時結成し、出演してくれたことも当社にとってたいへんうれしいことでした。

社屋を地域に開放することで、日ごろお世話になっていることへの感謝の気持ちが表せると同時に、社員が改めて地域とのつながりを認識できる機会になりました。また、文化芸術とは無縁と思っていた田舎の小さな会社にもクラシック音楽に勤んでいる仲間がいることで、会社に対する愛着と誇り？を感じてくれたのではないかと思います。(後日、社内忘年会でも登場してもらい盛り上がりました。)

派手な事業ではないかもしれませんが、文化芸術の草の根を定着させる大切な意味のある催しとして、ぜひ継続していただきたいと切に願うものです。



ホルントリオ「みらくる」(上) 記念撮影(下・後列最右が筆者)

*2018年の文化経済アートステージは、オプテックス株式会社様の4階ホールをお借りして、「マリンバ&ヴァイオリン 湖畔でコンサート」を開催しました。ありがとうございました。

2018年を振り返って。

2018年の始まりは、オランダのEKWC ヨーロッパ・セラミック・アート・センターでのアーティスト・イン・レジデンスからでした。文化庁の助成事業で滋賀県立陶芸の森とEKWCの作家交換プログラムで1ヶ月半の滞在制作を行いました。オランダで感じたのは、アートとクラフトがしっかりと分かれており、それぞれの流通があるということでした。



オランダのEKWC ヨーロッパ・セラミック・アート・センター

個人会員 田中 哲也 (陶芸家、野洲市)

4月には中国の富平陶芸村から招聘され、1ヶ月の滞在制作を行いました。その間に景德鎮で行われたアートフェアにも参加しました。中国经济の勢いを感じましたが、継続的な作品販売は、難しいように思いました。

9月には台湾を訪れ、IAC 国際陶磁アカデミーの国際会議で「Ceramics as Contemporary Art」と題して日本の現代陶芸と工芸の関係について講演しました。

11月に再び台湾苗栗県の国際陶芸祭に招かれ、講演とワークショップを行いました。陶芸における台湾と日本の市場構成は似ており、景気もまだ台湾の方が良いでしょう。

今後も市場にあわせたものづくりではなく、自分の作品に合った市場を探して行こうと思います。



国際会議で講演する筆者

連載 レポート近江屋考

「きのう、きょう、あす」④

歩くブログ記者 岸野 洋

京都新聞社友、前・(公財)滋賀県文化振興事業団理事長



豆腐屋さん跡、喫茶店になっている。店名は「102、オールドライバー」。豆腐と古川町を絡ませて、店前に「102」の数字がある。昔懐かしいラッパの～トーフ、トーフ～の音が聞こえてきそう。地下鉄東山駅を降りて、平安神宮と反対側の改札を出て、たこ焼き屋さんから始まる商店街をずっと南へ行くと、アーケード下に「とうふの近江屋」が目に入る。元豆腐屋さんは上田進一さん。近くの総菜屋さんで、住まいを聞くと、「夕方になると豆腐屋跡の喫茶店へ夕食兼ねて家族3人が揃われます」と情報を聞いて、午後5時過ぎに喫茶店へ行った。

先に奥さんが来ていて、昭和13年生まれで80歳の上田さんは、足がよくなく、後からだった。上田さん、耳も遠いと言うので、元氣な奥さんに話を聞くと、屋号は近江屋でも滋賀とは関係なく、主人は石川県小松出身という。近江屋は親戚の名前が近江なので、古川町へ来て、豆腐店開業のおり、近江食品にしたという。豆腐店は商店街にまだアーケードない頃からで、店売りだけでも、よく流行っていたけど、50年目でピタッとやめたとの話だった。滋賀・近江との直接の関係はなかったが、石川県には金沢市に人気の近江町市場

屋号の近江屋、商いに良くあうのだろうか。いつも気にして歩いているせいか、よく目にする。京都東山の古川町商店街に「とうふの近江屋」。店は3年前、半世紀で畳んだが、今も看板だけあり、滋賀・近江との関わりを知りたくて、聞きに行った。

がある。ここも滋賀の近江との関わりはよくわからないが、近江の名前は、～売り手よし、買い手よし、世間よし～の近江商人の三方よしの精神で、商売繁盛に縁起が良いようだ。

商店街の総菜屋さんで、上田さんの所在を聞いたおり、屋号の近江屋さんを調べている～と話すと、この総菜屋さんのお母さんが「うちの親戚はJR能登川駅前で、洋服の近江屋やっていますよ」と。そう言えば、東近江市の五個荘へ行く折り、バスの車窓から近江屋看板を見たのを思い出した。喫茶店の女性店主も滋賀県出身で、店内で時折り開くライブには大津市志賀出身の「近江屋」という名前のシンガーソングライターが出て、歌い終わって、近江屋！と掛け声がかかると



大喜びする～という話も聞いた。「とうふの近江屋」さんは、滋賀でなくても、どこか近江の糸で赤くつながっていると感じた。

第9回総会のご案内

日時：2月17日(日) 13:00～受付

場所：びわ湖大津プリンスホテル

プログラム1 13:30～14:00

2018年度事業報告・決算、2019年度事業計画・予算
役員改選

プログラム2 14:10～16:20

演奏会(出演：湖笛の会)

2018文化で滋賀を元気に！賞表彰式

「文化で滋賀を元気に！」する提言発表

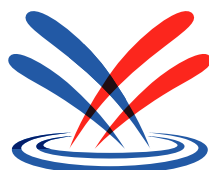
講演会「アーティストと地域をつなぐ

～瀬戸内国際芸術祭を事例に～」

講師 北川フラム氏

プログラム3 16:30～18:00

交流会(参加費：6,000円)



文化で滋賀を元気に！

参加をご希望の方は、

2月10日(日)までにお申し込みください。

詳しくは、ホームページをご覧ください。

<https://www.biwako-arts.or.jp/rd/bunkakeizai/2018.html>

文化・経済フォーラム滋賀 講演会

参加無料 要参加申込

アーティストと地域をつなぐ

～瀬戸内国際芸術祭を事例に～

講師 北川フラム氏(アートディレクター)

「瀬戸内国際芸術祭」などの総合ディレクターを務め、2018年度文化功労者に選ばれた北川フラム氏に、アートをきっかけにした地域づくりについてお話しいたします。

日時 2019年2月17日(日) 15:20～16:20

会場 びわ湖大津プリンスホテル コンベンションホール「淡海」
(大津市におの浜4-7-7 大津駅から無料シャトルバス約10分)

参加申込締切 2月10日(日)

主催 文化・経済フォーラム滋賀

問合せ 文化・経済フォーラム滋賀事務局

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜15-1

【電話】077-523-7146 【email】bunka-keizai@biwako-arts.or.jp

©Mao Yamamoto

2019年会員継続のお願い

文化・経済フォーラム滋賀の活動は、会員みなさまの会費で運営されています。1月は会員継続手続きの月です。ご案内を郵送させていただいておりますので、2019年におかれましても、ぜひとも引き続き会員をご継続いただき、「文化で滋賀を元気に！」する活動にご参画いただきますようお願い申し上げます。

【発行・問合せ】文化・経済フォーラム滋賀 事務局

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜15-1 びわ湖ホール内

電話：077-523-7146 FAX：077-523-7147 bunka-keizai@biwako-arts.or.jp

<https://www.biwako-arts.or.jp/rd/bunkakeizai/>